BAND SCORE

VAN HALEN

5150

ヴァン・ヘイレン●5150

TAIYO MUSIC, INC.

GOOD ENOUGH

グッド・イナフ

by Edward Van Halen, Sammy Hagar, Michael Anthony & Alex Van Halen

■この曲のポイント

GUITAR：いかにもエディらしい元気一杯のプレイ。アルバム中の他曲に比べると以前の『ヴァン・ヘイレン』らしい雰囲気が残っている曲で、ギター・パートについても同じことがいえる。ギター・ソロは$\frac{4}{4}$拍子と$\frac{2}{4}$拍子を交互にくり返すリズムなので、個々のフレーズは弾けても、バックにのせるのは難しいだろう。

BASS：もともと手数の少ないマイケルだが、彼にしてはよく動くラインを弾いている。動くといっても部分部分のフィルイン的なものながら、音の選びかたはやはり絶妙だ。彼のプレイに関しては、特にビートの重さや音の太さに注目してもらいたい。これは他の曲についても同様だ。

DRUMS：この曲のみならず、タムの音がエレクトリック・ドラムのようなトーンになっている。アクセントの移動によるフィルインが印象的なナンバーだ。

❶(Gt.)：何ということはないリフのように見えるが、いざスムーズにつなげようとすると、グリッサンド以降がなかなか弾きにくいはず。

❷(Dr.)：この部分のハイハットには、タッチにより聴こえない音もある。ハーフ・オープンのワイルドなサウンドだ。

❸(Gt.)：ピッキング・ハーモニクスで4倍音を出している。¾からブリッジまでの長さの4分の1のポイントをピッキング。

❹❺❻(Ba.)：4小節目ごとのラインは、地味ながらも大変ツボを心得たもの。以下同様に4小節目ごとのラインに注目したい。

❺(Gt.)：アーム・ダウンした3/0の音が、ほぼA音になっていることに注意。△印は、アーム・ダウンした3弦をリリースするときに生じる弦振動を利用し、ノー・ピッキングでハーモニクス・ポイントに触れるものだ。

❼(Gt.)：チョーク・アップした5/11をタッピング。

❾(Dr.)：3連譜は、次の小節の1拍目への装飾音と考えるとよい。

❿(Ba.)：ベースのフィンガー・ボード上では少々つらいフィンガリングだが、ここは人差し指～小指を正しく用いたいところ。

⓫(Gt.)：12・7・5フレット真上と、3フレットよりわずかに4フレット寄りの、4ケ所のハーモニクス・ポイントを使いわけたプレイ。

⑫(Gt.)：全弦を左手でミュートして１弦→６弦へすばやくピッキングしているようだが、どのあたりをミュートしているかは定かでない。

⑬(Dr.)：ティンバレスのような音。エレクトリック・ドラムとも考えられる。

⑭(Dr.)：アクセントにポイントのあるシンコペーションのつもりで。

⑮(Dr.)：手足のコンビネーションに充分注意してほしいところ。
⑯(Gt.)：5/3を押弦した左手の指をスピーディにグリス・アップ、そしてプリングして0/3の音を出す。
⑰(Dr.)：アクセントの位置に注意。⑭と同じだ。
⑱(Gt.)：Bの1～2・5～6小節と似ているが、少しだけ違う。この辺のヒネリかたがエディらしい。
⑲(Gt.)：弦のナットとペグのあいだをピッキングした音だ。

❷⓪❸⓪(Dr.)：クラッシュ系の、しかも大きなサイズのシンバルで刻んでいる。そのため音の輪郭も明確ではない。

❷①(Ba.)：$\frac{4}{4}$拍子と$\frac{2}{4}$拍子をくり返す。$\frac{2}{4}$のほうは毎回ラインが違っている。ノーマルなビートではないので、まずリズムにのることから始めたい。

❷❷(Dr.)：❷⓪❸⓪とは変わって、かなり硬めのライド・シンバルを用いているようだ。

❷❸(Gt.)：待ってましたのライト・ハンド奏法。開放の音を使うので、左手のプリング、ハンマリングもしっかりと。

㉔(Gt.)：1拍のあいだに2度アーミングし、フレーズにネバリを出している。よほどアームに慣れていないとこうはいかない。

㉕(Gt.)：プリングと同時にアーミング。ほぼ正確に1音下がっている。

㉖(Gt.)：❺と同様だが、アーム・ダウンでG音あたりまで下がっているのはエキサイトしているためだろうか。

㉗㉙(Ba.)：ギターとユニゾンで盛り上げる部分。ややもすると一気に走ってしまうので注意したい。特に㉙ラストの2小節がアブナイ。

㉘(Dr.)：スティック・ショットは、おそらくオーバー・ダビングによるものだろう。

A
D
A
D
Chorus
F
Uh Uh Uh Uh Uh Uh Uh
Vo.
What's happened Rock a what Well I'll be have some of that
Gt.
Ba.
Dr.
D
A
D
A
D
Uh Uh Uh Uh Uh Uh Uh
Uh Uh Uh Uh Uh Uh Uh
Hey
Chorus
(3times Repeat)
Asus4
G
1.C A
Chorus
Blind
Hey Hey I'll be the
(1x) first to say
(2x) two days gone
(3x) ain't no fool
that I'm blind to the world
and I just can't see
and hon - ey I know a

㉛(Gt.)：最初のピッキング・ハーモニクスは６倍音、次は８倍音というように、ハーモニック・トーンをしっかり使いわけているのが驚異的だ。

❸(Gt.)：ライト・ハンド・タッピングを多用した流れるようなフレージング。１弦からスタートし、次の弦に移るときは左手のハンマリング(△印)で音を出してつないでいく。チョーキングも使っているのでギクシャクしないよう気をつけること。

❸(Dr.)：フリーのソロ(フィルイン)で、譜面には表しにくいもの。原曲を参考にタイミングをつかもう。

WHY CAN'T THIS BE LOVE

ホワイ・キャント・ディス・ビー・ラヴ

by Edward Van Halen, Sammy Hagar, Michael Anthony & Alex Van Halen

■この曲のポイント

GUITAR：『5150』の中では最も弾きやすい曲（ライヴではサミー・ヘイガーがギターを弾いているくらいだ)。だが、何気ないコード・バッキングの随所に交えられたブラッシング、D～Fの組み立てられたソロのキメ細かさはやはりエディならではのものだ。特にD～Fのソロは、聴くと弾くとは大違いなので油断禁物。

KEYBOARD：この曲では、ギター的なリズム・カッティング・フレーズをプレイすることになる。シンセにディストーションをかけるのも手だが、それ以上にフランジャーを用いると効果的だ。

SYNTH. BASS：Intro.前のフレーズは、まぎれもなくシーケンサーによるもの。以降もおそらくシーケンサーであろう。この16分を手弾きする際は、親指と中指を交互に使うと比較的プレイしやすい。音色的にはオクターヴを重ねた線の太いものを選び、ADSRの設定は原曲をくり返しよく聴いて注意深く行うこと。

DRUMS：タムがエレクトリックか、それともイコライジングか微妙なところだ。バスドラもエレクトリック・ドラムのような音になっている。大きなノリのドラミングを。

❶(Kb.)：キーボード・パートがリズム・カッティングを行っているIntro. 1小節前の入りのフレーズなどは、ベンダーとモジュレーション・ホイールを上手に使ってギター的なニュアンスを出そう。

❷(Gt.)：♪はブラッシングだが、その上にF.S.の記号のあるものは巻弦上を移動する指によるノイズを表したもの。この曲の場合、このノイズを故意に強調しているようだ。

❸❼⓱(Dr.)：このハイハットはハーフ・オープンのワイルドな音。汚ない感じにならないように気をつけたい。

❹(Kb.)：音色は❶と同様だが、フレーズはよりテクニックを要するものだ。16分音符を正確にプレイできるまでしっかり練習しよう。また16分のウラが比較的多いので、モタらないように注意すること。

❺⓫⓰(Dr.)：ヘヴィで硬めのライド・サウンド。
❻(Dr.)：2×はスネアではなくタム。2拍目のみエレクトリック・ドラムかもしれない。

❽(Dr.)：32分音符は、4拍目ウラの8分音符への引っかけのつもりで。

❾⓯(Gt.)：この部分は指弾き。FとGのコード・トーンを交互に使っている。このとおりでなくても、10～12フレットあたりのFとGのコードをストロークするだけで雰囲気は出せるだろう。

●(Kb.)：ギターとユニゾンのフレーズをプレイすることになるので、ギターとピッタリ息を合わせることが第一だ。そしてモジュレーション・ホイールを使ってヴィブラートを上手くつけること。

⑫(Gt.)：人差し指と薬指のジョイントを多用するが、その際必要な弦だけを押弦できるようにしたい。

⑬(Gt.)：アーミングのタイミングをとるのが非常に難しいだろう。

⑭(Gt.)：ダウンしたアームをリリースするだけでも音は出るが、プリング、グリッサンドも併用しているようだ。

●(Dr.)：クラッシュ・シンバルによる刻み。

GET UP
ゲット・アップ

by Edward Van Halen, Sammy Hagar, Michael Anthony & Alex Van Halen

■この曲のポイント

GUITAR：ちょっと聴くとボトル・ネックで弾いているように思えるリフ、実はこれがトランス・トレムのアーミングだ。これは他のギターでは再現しにくいが、アームを使わずグリスにする、単音でアーミングするなど工夫してみる価値はあるはずだ。

BASS：とてつもなくアップ・テンポなので、リズム・キープに専念するだけでもかなりハードなはず。原曲はミキシング・バランスによりベースが聴きとりにくく、一部採譜が不完全なところがあることをお詫びしておきたい。

DRUMS：ツーバスの醍醐味が味わえる超ハード・ナンバー。左右のバスドラの音色の違いにも注意しよう。ハイハットは2拍・4拍にアクセントをつけるつもりで。すべてハーフ・オープン気味だ。

❶(Gt.)：のっけからトランス・トレムならではのアーミングを多用したプレイだ。アームでここまでピッチを正確に保っている点に注目したい。

❷(Gt.)：おそらく5/6の3倍音がフィードバックしたので、アームで半音アップしてF音にしたものと思われる。

❸(Dr.)：このスネアは2拍目に比べて軽めに。

❹(Gt.)：メインとなるリフ。シンプルなものではあるが、とにかく大変なアップ・テンポ(♩≒300)なので、実際に弾くのはかなりハードなはず。特にアームを戻すタイミングが難しい。

●(Ba.)：ギターのリフをフォローするライン。だからといってギターについていくだけではダメだ。

❻(Dr.)：D.S.1.timeのみクラッシュを使用。

❼(Gt.)：全パートに共通することだが、ここの$\frac{9}{8}$拍子の１小節は難易度が非常に高いところ。これだけのアップ・テンポでよく合うものだと、ひたすら感心してしまう。$\frac{4}{4}$拍子のままにアレンジしてやったほうが無難だろう。

❾(Dr.)：D.S.1、D.S.3.timeはスティック・トゥ・スティック。

❾(Gt.)：シンプルな6小節パターン。力強いブラッシングと、5～6小節の歯切れよさがポイントだ。後者はかなり難しいだろう。

⑩(Gt.)：いかにもエディらしいリフの組み立てかただ。これだけ少ない音で彼らしさが出ているのは特筆に値する。

⑪(Ba.)：４分で弾いているか８分で弾いているかよく聴きとれないが、おそらくこのようなラインだと思われる。

⑫(Gt.)：⑩と同様のリフを４度下でプレイする。

⓭(Ba.)：この部分はよく聴きとれるので、このようなテンポでもベースが伸び伸びと強力なことがよくわかることだろう。

⓮(Gt.)：⅓の3倍音をピッキング・ハーモニクスで出す。

⑮(Gt.)：ヴォリュームを絞って若干クリアな音で。キーボード的な発想のパターンだ。指弾きでこのテンポにのせるのは至難の技なはず。

⑯(Dr.)：マーチング風のソロ。ダブル・ストロークやパラディドルがしっかりマスターできていないとサマにならない。アクセント以外の音は抜いた音と考えてよいだろう。

A
E△7
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
A
E△7
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.

⑰(Gt.)：譜面を見たかぎりでは何ということはないライト・ハンドのフレージングだが、このテンポで、しかも寸分の狂いもなくリズムにのせるのはとても難しい。3/2→3/4へのストレッチもかなりキツイと思われる。

⑱(Ba.)：ここは8分弾きのようだ。信じられないスピードで、しかもバスドラとピッタリ合っている。当然と思わずよく噛みしめて聴いてほしい。

⑲(Dr.)：この刻みはクラッシュによるものだ。

C
C♯m
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
D
C
E
4:9
18
19

E
Vo.
(h.+p. with Right Hand)
Get Up
8va
cho.
p.
Gt.-I
Gt.-II
Arm.
Ba.
Dr.
D.S.3.
3.Coda (3times Repeat)
A G A C A G A F D
(1x)
(2,3x)
And make it work
2,3x

⑳(Dr.)：フリーのソロ。原曲を参考に自由にプレイしよう。

DREAMS

ドリームス

by Edward Van Halen, Sammy Hagar, Michael Anthony & Alex Van Halen

■この曲のポイント

GUITAR：アコースティック・ギターのメロディックなメロと、エレクトリックの強烈なソロとのコントラストが印象的だ。ソロのフレージングは相変わらずだが、アコースティックのメロがよくうたっているのがすばらしい。おそらくクレイマーのストラト・シェイプのアコースティック・ギターを使っていると思われる。エレクトリックで弾く場合には、ハーフ・トーンなどを使えば感じは出せるだろう。

KEYBOARD：終始強力なコード・バッキングが行われている。アコースティック・ピアノ的な音色とポリ・シンセが、まったく同じことを重ねてプレイしており、MIDI仕様のCPなどでシンセと同期させていることが充分考えられる。そのため機材さえあれば、キーボーディスト1人で充分プレイ可能だ。

BASS：ややもすると軽く流れてしまいそうなテンポだが、適度な重さをキープして弾いてほしい。逆に重すぎると曲のイメージに合わなくなるので注意すること。

DRUMS：バラード風のナンバーで、ドラミングもスケールの大きいものになっている。ハーフ・オープンのハイハットの音色には気をつけてほしい。

❶(Gt.)：フィンガリングは非常に簡単だが、グリッサンドのニュアンスが絶妙だ。ゆったりとうたうように。

❷(Kb.)：ギターのフレーズをハーモナイズしている。ドラムスが休みのため、ギターとともにしっかりとリズム・キープすること。ギター、キーボードのどちらかがカウントを出す場合は、あらかじめドラムスとテンポの打ち合わせを充分行っておきたい。

F C Csus4 C Gsus4 C F

Vo.

Gt.

Kb.

Ba.

Dr.

Asus4 Am G F C

Vo.

Gt.

Kb.

Ba.

Dr.

❶(Kb.)：ここからコード・バッキングが始まる。左手が8分の連打のため、リズムの縦の線を合わせるのが比較的難しくなるはず。また遅れがちになるのもこのテのパターンだ。左手をオクターヴでキープできない場合は、下声部を単音で連打するか、オクターヴで4分音符の連打にしてしまうのが無難だ。

❹❺(Gt.・Ba.)：全パートに共通することだが、8分の連続だからといって必要以上に重いビートにしないように。

Csus4 C C Csus4 C Csus4 C C(onE) Csus4(onE) Am7

Vo.

Arm.

Gt.

Arm.

12 12 12 5 3 4 2 2 0

Kb.

Ba.

3 3 3 3 0 0 1 3 3 3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

Dr.

❻(Gt.)：ヴォーカルとほぼ同じタイミングでウラメロをプレイ。あくまでもヴォーカルをフォローする気持ちで。

❼(Ba.)：コードの変わりめが普通のパターンではないので、それに引きずられてビートがギクシャクしないよう注意すること。

●(Dr.)：キーボードと相まった3連フレーズと考えてほしい。

❾(Ba.)：❼と同様だが、１拍目で音が動く部分は軽く流れないようタイトに。

⓾⓮㉔㉕(Dr.)：この刻みはクラッシュによるものだ。

C　Am　F△7　1. G7sus4　2. G7sus4　F(onG)

Vo.

high - er ___ and high - er ___ leave __ it all be - hind ___

high - er ___ and high - er ___ who __ knows ___ what we'll find__

Gt.

Kb.

8va bassa

Ba.

Dr.

❾ ❿ ⓫

❻(Dr.)：エレクトリック・ドラムともとれる音になっている。

⓬(Kb.)：左手パートがキメテ。これはベース、ドラムスとユニゾンのキメで、また右手パートはギターとユニゾンになる。バンド全員で一緒にくり返し練習し、タイミングをジャストに合わせてもらいたい。

⓭(Gt.)：アコースティック・ギターのメロディ弾き。❶と同様だ。エレクトリック・ギターは6小節目までベース、ドラムスとユニゾンのリズム、7小節目からは8分の連続でコード弾きを。

⓯(Dr.)：D.S.timeは、8分の刻みがクラッシュに変わる。

⓰(Dr.)：直前までの刻みのトーンのため、アクセントはつかない。

⑰(Kb.)：ベースをサポートするものだが、決して遠慮したりせず、fで力強くプレイすること。

⑱(Dr.)：[rhythm figure]がアクセントのため↓↓に聴こえる。なおここはハーフ・オープンだ。

⑲(Gt.)：ここはアームだけでなく、グリスも併用して音をつなぐ。

⑳(Dr.)：クラッシュによる刻み。8分音符でキープしているとも考えられるもの。

㉑(Gt.)：⅗をチョーク・アップし、⅗～ブリッジの$\frac{1}{5}$の点と$\frac{1}{3}$の点を交互に右手指で触れながらピッキング、5倍音と3倍音を出しながらチョーク・ダウンを行う。

㉒(Gt.)：後半の音のつなぎかたはオーソドックスだが、アーミング、符割りによってエディならではのフレーズになっいる。

㉓(Gt.)：ライト・ハンドによる普通のタッピングと、タップ後急速にグリス・アップするテクニックが出てくる。２小節目ラストの$\frac{2}{13}$は、左手のハンマリングだけで音を出すものだ。

Coda Gsus4 | H | C(onE) | Dm(onF) | Asus4 Am G | 1.

Vo.: 1x tacet — the end — on Dreams — we will — de - pend — (1x tacet)

Gt.: A.Gt. | E.Gt.-II | 8va | 1x only | cho. | (1x only) | (8va) | g.

A.Gt Continues Intro.-I 's 8bars Pattern

Kb.: 8va bassa

Ba.

Dr.: ㉖ ㉕

㉖(Dr.)：このアクセントには特に要注意。ただしこれは１×のみである。

㉗(Gt.)：１小節目ラストのグリッサンドはポジション移動を兼ねているが、しっかりＡ音に落ち着いているのが見事だ。なおラストのグリッサンドは㉓と同様のもの。

㉘(Dr.)：シンバルは響きが残っているだけ、実際はショットしていないとも考えられる。

2.
G
F△7
Am
Vo.
And in
Cause
that's
what love
is made
Gt.
8va
cho.
g.
T
A
B
A.Gt. Coutinues Intro.-1's 8bars Pattern
Kb.
Ba.
Dr.
25
C(onB♭)B♭
F△7(onA)
B♭
F
C
of
(8va)
(8va bassa)

SUMMER NIGHTS

サマー・ナイツ

by Edward Van Halen, Sammy Hagar, Michael Anthony & Alex Van Halen

■この曲のポイント

GUITAR：スタインバーガーのキー・トランスポーズ機能を活かしたプレイ。Intro.-Iと F は2 STEPS UP、E は1 STEP DOWNとなっている。ギター・ソロを弾いているほうのギターはスタインバーガーかストラトか定かでないが、1・2弦のアーミングのピッチ変化の大きさから、スタインバーガーの可能性も高いといえるだろう。リフやソロは非常に凝ったもので、難易度200%といったところ。

BASS：何より A のリフのビートの重さが強力な曲。珍しくマイケルがテクニックを披露しているところが2、3ケ所あり、その中にはエディとオクターヴ・ユニゾンでライト・ハンドのフレーズを弾いているところも見うけられる。長年のつき合いなので、実はこのくらい朝飯前なのかもしれない。

DRUMS：基本的にはシャッフル系のリズムだが、場所によって様々なニュアンスのリズムが出てくるので注意が必要。♪♪♪♪は♫♫♫♫のつもりでプレイすればノリが出てくるハズだ。

❶(Gt.)：のっけから、トランス・トレムを2 STEPS UP(短3度アップ)した状態で弾き始める。

❷(Gt.)：ここまでのリフのゆったりとした流れの中に、このスピーディなラインを溶け込ませるのは意外に難しい。ラストのB♭音は、左手のハンマリング(△)のみで音を出しているのかもしれない。

❸(Gt.)：❷と同様、そしてここではライト・ハンドも用いる。ますますめんどうなもの。

❹(Gt.)：CからAに動くときにアームをもとにもどしているようだが、つなぎが実にスムーズだ。

❺❻(Gt.)：❷と同様のラインでKeyが変わっただけ。ラストのG音は△の可能性あり。

❼(Ba.)：マイケルにしては珍しい突然のフィルイン。テクニックの余裕が感じられる。

❽(Gt.)：何ということはないリフだが、ブラッシング音でノリを出すのがポイントだ。
❾(Gt.)：G#音→A音もハンマリングの可能性がある。いずれにしてもピッキング1回だけで音をつなぐため、左手でしっかりリズムを出さなくてはならない。
❿(Gt.)：ここは完全にアタマの6/10だけピッキング。
⓫⓬(Dr.)：この16分は、どちらかというとシャッフルではなくイーブン(♬ − ♬)に近いもの。
⓭(Dr.)：♬が♬と♬の中間のような微妙なビートに変わる。
⓮(Gt.)：キメらしからぬややこしいフレーズ。開放弦からのハンマリングに注意しよう。

⑮(Dr.)：ハーフ・オープン気味のハイハット。ルーズに(シャープになりすぎないように)キメたい。

⑯(Dr.)：⑪⑫と同じ。4拍目のアタマを抜いた3連符との対比がトリッキーだ。

⑰(Gt.)：⑭同様キメにしてはやっかいなもの。ライト・ハンドでグリスして音をつなぐところがポイントだ。

⑱(Ba.)：おそろしいことに、ギターとユニゾンでライト・ハンドのフレーズを弾いている。

⑲⑳㉕(Dr.)：これは正確にイーブンにすること。
㉑(Gt.)：トランス・トレムを1 STEP DOWN、チューニングを1音下げる。

㉒(Dr.)：ここからは必ずしも♫＝♪♪ではなくなってくる。他パートのリズムとのコンビネーションをよく研究してみてほしいところだ。

㉓㉗㉙㉚㉛(Dr.)：を正確ににすること。

㉔(Gt.)：アタマの１音だけピッキング（またはアーム・リリースのみで音を出しているかも）、あとはハンマリングなどで音をつなぐ。最後の１拍は正直なところ判断しかねる。

㉖(Gt.)：グリス・アップからプリングで音を出し、㉔同様に音をつないでいく。もちろんノー・ピッキングだ。

㉘(Gt.)：アーミングやライト・ハンドを駆使してのフレージング。１小節目ラストの1/13から２小節目アタマの1/17をハンマリング、2/17→1/13の音の動きをハンマリング(△)にすれば、最初の１音だけのピッキングで４小節間音をつないだことになり、実際その可能性も高い。

㉜(Gt.)：他曲にも出てくる、エディが最近好んで使っているらしいライト・ハンドのフレーズだ。

㉝(Dr.)：ここからはイーブンになる。16ビートのフィーリングで。

❸(Gt.)：ハーモニクスを使いながらも、リズムに非常によくのっているのが見事だ。

❸(Ba.)：アルバム中で唯一、自由に弾いている部分だといえるだろう。マイケルがいかにテクニシャンかということがよくわかるはずだ。

BEST OF BOTH WORLDS
ベスト・オブ・ボース・ワールズ

by Edward Van Halen, Sammy Hagar, Michael Anthony & Alex Van Halen

■この曲のポイント

GUITAR：いかにもストラトらしい粘りのあるトーンが魅力的で、ヴォリュームを絞ったときのクリアな音も、フル・アップの歪んだ音も大変ハリがある。ギター・ソロは8小節と短いが、エディのネタがギッシリつまった重みのあるものだ。それ以上にバッキングなどのリフが非常に凝っており、こちらのほうがプレイは大変だと思われる。

BASS：エディのリフが凝っているためか、ベース・ラインは極端にシンプル。5弦ベースを使用しているようだが、最低音はD音なので、ノーマルなベースでも充分プレイ可能だ。

DRUMS：ちょっと聴いただけでは、どこがアタマかわからないナンバーだ。それだけにリズム的に面白い曲なので、曖昧に何となく流したりせず、しっかり把握して叩いてもらいたいところだ。

❶(Gt.)：エディお得意のロー・コードを用いたリフ。6弦を押弦した指で5弦をミュートするのがポイントだ。

❷(Gt.)：アタマの休符でヴォリュームを絞り込み、ピック弾きから指弾きにチェンジ。5弦を親指、4〜2弦は順に人差し指、中指、薬指で弾く。

❸(Gt.)：再びヴォリュームを上げてピック弾きに。

❹❻⓫⓭(Dr.)：クラッシュ・シンバルの刻み。ただし明らかなアクセント・プレイには>をつけてある。

❺(Gt.)：ヴォリュームは絞っていないようだが、ソフトなピッキングのためそれほど歪んではいない。よく練られた4小節パターンだ。

❼(Dr.)：クラッシュの刻みの中で、この1拍だけはライド・シンバルだ。

C
A G A Am7 D(onA) A
2x
Vo.
(1x) Come on ba - by close your eyes let go This can be ev - ery - thing we've dream-ed
(2x) There -'s a pic - ture in a gal - lery of a fall - en an-gel look - ed alot like you
Gt.-I
Gt.-II
2x only
Ba.
Dr.
2x
G A Am7
It's not work that makes it work on no Let the mag- ic do the work for you my hon - ey
We for- get where we come from some-times I had a dream it was real -ly you
(2x only)

❽(Gr.)：エディでなければとても思いつかないようなパターン。特に1小節目の音使いは、そのトーンと相まってロック界のウェス・モンゴメリーといってよいほど効果的なものになっている。

❾(Gt.)：❽と同様。こちらも1小節目がユニークだ。

❿(Ba.)：いきなりのフィルイン。つまってしまわないように。

⓬(Dr.)：この８分音符は、１×のみライド・シンバルのようだ。

⓮(Gt.)：手クセともいえるペンタトニックのフレーズ。ハイ・ポジションの音に開放の音を交えて使うのも彼が頻繁に用いるテだ。

⑮(Gt.)：この間、タッピングその他で音をつないでいるためノー・ピッキング。

⑯(Gt.)：タッピング&グリス・アップという大変トリッキーな技が出るが、これも彼の得意技。22フレットより先までひと息にグリス・アップしているらしく、22フレットの音が聴きとれる。△印は左手のハンマリングのみで音を出すもの。

⑰(Ba.)：５弦ベースを使用しているらしくＤ音が出てくる。４弦ベースで弾く場合、3/5と2/7の２音を同時に出すことで、ある程度はカバーできるだろう。

⑱(Dr.)：本当ならここで一気に盛り上げたいところだろうが、あえてサラッと流し、ちょっとしたプレイでさり気なくⒽにつなげている。

⑲(Ba.)：ギター・リフをフォローするかたちのライン。極力ソフトに弾きたい。

⑳(Ba.)：3×のみラインが変わり、それに伴いコード・ネームも変わるが記譜は省略した。

㉑(Ba.)：かなり自由なプレイが聴かれる。こういう部分で、いかにすごいテクとセンスの持ち主かということがわかるだろう。

LOVE WALKS IN

ラヴ・ウォークス・イン

by Edward Van Halen, Sammy Hagar, Michael Anthony & Alex Van Halen

■この曲のポイント

GUITAR：曲の中程とラストの2ケ所のソロのみギターが参加しているが、特に曲中のほうはあらかじめある程度組み立てたらしく、大変よくうたうエモーショナルなソロになっている。感情が欠如していると酷評を受けたこともあるエディの面目躍如といえるだろう。

KEYBOARD：まったく同じことをシンセとピアノで弾いており、MIDIでの同期が不可能であればキーボーディストは2人必要。この場合シンセをプレイするキーボーディストは右手で上段をピアノと重ね、左手でシンセ・パートをカバーするように。こうすればシンセ・ベースまでカバーでき、2人ですべて弾いてしまえる。

SYNTH.BASS：音色的にはオクターヴを重ねた分厚いものが好ましく、ポリ・シンセの場合はユニゾン・モードにしてプレイすると存在感が出て効果的だ。ポイントは決して走らないこと。どちらかといえば多少引っ張り気味のキープがベスト。エレクトリック・ベース(5弦)もユニゾンで弾いているようだが、レベルが低いのでカットした。

DRUMS：ドラマチックなバラード・ナンバー。ドラミングもスケールの大きいものだが、細かいテクニックにも注目してほしい。なおシンバルは、タッチによって聴こえない音もあるので注意すること。

❶(Kb.)：イントロはキーボードだけでプレイするため、あらかじめドラムスとテンポの打ち合わせを行うこと。場合によってはドラムスにカウントを出してもらって始めてもよい。

❷❸(Dr.)：ダイナミクスに注意し、ムードたっぷりに盛り上げよう。

❹⓮㉒(Dr.)：ハーフ・オープン気味のハイハットだ。

❺(Kb.)：ヴォーカルのコード・バッキングだが、左手のフレーズに動きがあるため、両手でプレイするとなるとテクニックを要する。ただしこのテのナンバーではよく用いられるものなので、この際しっかりマスターしておきたい。

❻(Dr.)：(　)内のスネアはD.S.timeのみ。バスドラもオーバー・ダビングしてあるようで、2拍目ウラの音はフラムのように聴こえる。

❼(Dr.)：シンバルの刻みはD.S.timeはハイハットに変わる。

❽(Kb.)：ここからリズム・パターンが複雑になるが、ドラムスは基本ビートをキープしているので、ドラムスをよく聴いて、タイや16分のウラが曖昧にならないよう心がけること。

❾(Dr.)：１×ではスネアだが、２×でタムに変わる。

❿(Dr.)：シンバルで次第にクレッシェンド。

⓫(Dr.)：トリッキーでメカニカルなフレーズだ。カッコよくキメたい。

⓬⓰(Gt.)：シンプルながら印象的なメロディ。2/18を中指、2/20を薬指でチョーキングすることで、スムーズに音をつなぐことができるはずだ。これは事前に作っておいたラインだろう。

⓭(Kb.)：ギター・ソロのバッキングながら、ハーモニーを出しているのはキーボードだけなので、あまり控えめになる必要はない。

⓯(Gt.)：特に示さなかったが、ここで微妙にアーミングしているようだ。

⑰(Gt.)：フロイド・ローズではピッチ変化の少ない1・2弦でのアーミングだが、比較的大きく音が動いているため、相当スピーディなアーミングが要求されるはず。特に2つめのアーミングは強烈だ。

⑱(Gt.)：「ジャンプ」のソロのラストを思わせるハンマリングのフレーズ。かなり正確な7連符にのせて弾ききっている。

⑲(Gt.)：1/20だけでなく、2弦の音もかすかに鳴っているようだ。

⑳(Gt.)：完全に２本の弦をチョーキング。

㉑(Gt.)：ゆったりとしたフレーズの連続だが、アーミングやグリッサンドを駆使しているのに少しも嫌味にならず、いかにもエディらしく、しかもエモーショナルにうたわせているのが見事だ。

Dm7
F(onB♭)
Csus4
C
F
F(onA)
Vo.
Love comes walk - in' in
Ba - by pull a string
Gt.
Arm. Arm.
p.
cho.
8va
Kb.
Synth. Bass
Dr.
Love comes walk - in' in

㉓(Gt./Kb.)：エンディングはリタルダンドになっているので、ドラムスのタムに合わせてプレイする。

"5150"

"5150"

by Edward Van Halen, Sammy Hagar, Michael Anthony & Alex Van Halen

■この曲のポイント

GUITAR：6弦の開放がD音になっているが、これはスタインバーガーのトランス・トレムによるものではなく、従来からのクレイマーのストラトの6弦のみをD音に下げて使用しているようだ。アルバムのタイトル曲らしく、非常に複雑なリフ、キメ、大変長いソロ……と、どれをとっても難易度200%モノ。

BASS：5弦ベースを使用しているようだ。最低音はD音だが、この低さが曲のポイントになっているため、4弦ベースの4弦をD音に下げてプレイするとよいだろう。タブ譜はそれに従ってつけてある。なおこの曲ではベースのレベルを低めにミックスしてあり、一部採譜が確実でない点があるかもしれないことをお詫びしておく。

DRUMS：変拍子で、ドラムの見せ場も多い。ストレートなノリの中で、シンコペーションを生かすことができるように心がけてほしい。

❶(Gt.)：何ともやっかいな8小節パターン。コードのアルペジオを弾いている部分で、2音ずつか1音ずつかはその場の勢いによるようだ。

❷(Ba.)：5弦ベースの5/3の音だ。3/5と2/7の和音で代用してもよいだろう。

❸❹(Dr.)：スタッカートに注意してほしいところ。
❹(Dr.)：┌┬┬┐の刻みが↓↓に聴こえる。↑はスティック・ショットだ。

E
D
Vo.
Gt.
Ba.
Dr.
A
D
to
A
E
A
D
E
D
A
D
A
E
A
D
8va
2x
p.
g.

❺❻(Gt./Ba.)：ギターは⅚A音をベース音にDとEのトライアドを弾いているが、ベースがさらに下でD音とA音を弾いていることで、一部非常に複雑なコードとなっている。このため譜面のほうは、わかりやすいように簡略化したコード・ネームを記しておいた。

❼⓯(Dr.)：おなじみのクラッシュの刻み。

❽(Ba.)：ミキシング・レベルが低いためラインが完璧にはつかめないが、ほぼこのように弾いていると思われる。

❾(Gt.)：大変ヘヴィなリフ。6弦D音がさらに重厚感を強めている。A 2～3小節のフィンガリングは変則チューニングならではのもの。慣れるまでは少しとまどうかもしれない。

❿(Ba.)：2分音符部分はギターとユニゾンの可能性もあるが、いずれにしてもギターのノリとピッタリ合わせることだ。

⓫(Gt.)：❾から一転して明るいバッキング・パターンに移る。重くなりすぎないように。
⓬⓭(Dr.)：バスドラはが と聴こえているものとも考えられる。

⓭(Gt.)：変拍子に聴こえてしまうほど強力にめんどうなキメだ。また変則チューニングのため、フィンガリングも通常のパターンではない。何回も弾いて体で覚えてしまうしかないだろう。

⓮(Ba.)：とてもわかりにくいキメなので、この部分だけピック・アップしてくり返し練習してほしい。

⑯(Dr.)：ここはどうやらエレクトリック・ドラムのようだ。

⑰(Dr.)：譜面は４分休符だが、実際には前のクラッシュの響きが残っている。

⑱(Ba.)：これ以降は4小節パターンのくり返し。4小節ごとにフィルインのラインを弾いているようにも聴こえる。

⑳(Gt.)：ハイ・ポジションでのフレージングに開放の音を交えるのは、エディの得意とするテクニックだ。左手のフォームが安定していないとスムーズなリズムは望めない。

㉑(Gt.)：4～1弦にわたるライト・ハンド奏法のフレーズだが、これまでにはあまり見られなかった組み立てかたといえる。

㉒(Gt.)：ここのタッピング&グリス・アップは非常に短時間で行っているので、22フレットまでは至っておらず、17フレットぐらいまでになっているようだ。

㉓(Gt.)：始めの6拍でリズムにのっておいて、7～10拍目は2拍5連で弾いている。

Bm11
E(onA)
D(onA)
A
Vo.
Tremolo Picking
8va
cho.
p.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
G(onA)
F(onA)
A
A E A D
cho.cho.p.
h.+p.
g.
(8va)
D.S.

Coda
D A E A D D
2x
Vo.
Al - ways one more
(1x) You're
(2x) to
Gt.
8va
g.
Ba.
Dr.
E(onD) D(onA)
nev - er sat - is - fied
meet you half the way
Nev - er one for all
If you don't know
D D A(onD) D(onA) A E(onA) A D(onA)
with you it's on - ly one for me
what that means
So why draw the line
p.
Repeat & Fade Out

INSIDE

インサイド

by Edward Van Halen, Sammy Hagar, Michael Anthony & Alex Van Halen

■この曲のポイント

GUITAR：『ヴァン・ヘイレン』にしては大変異色で、16ビートのノリを持つナンバー。非常に細かいビートをオーバードライブしたギターで表現している点に注目してほしい。特にⒷのリフはエディならではのものだ。

SYNTH. BASS：シンセでベース・ラインをプレイすることになる。音ひとつひとつの長さを正確につかむことがポイントだ。音色はデジタル・シンセで作ったもののようだが、アナログ・シンセを用いる場合には、オクターヴを重ねた分厚い音色に。

DRUMS：16ビートの異色ナンバー。フィルインは3連フレーズが多く、ゆったりとグルーヴしたドラミングが望ましい。

❶(Gt.)：ちょっと聴いただけではどうということもないように思えるが、左手をストレッチしなくては弾けないもの。3フレットに人差し指、5フレットに中指、7フレットに小指を置くワケだ。

❷(Gt.)：ヴォーカルとのユニゾン。グリスのタイミングがポイントになる。

❸(Gt.)：各小節アタマのブラッシングと、それに続く１拍目ウラからのハンマリングがバツグンの効果をあげている。ここさえ押さえておけば、２～４拍は自由に弾いてしまってかまわないだろう。

❹(Dr.)：符割りがめんどうだが、3連フレーズと考えればよい。

❺(Gt.)：Dmコードのグリス・ダウン&アップを、ポジションを変えながら3回行う。

❻❼(Dr.)：これも3連フレーズ。最後のクラッシュは、響きを次の小節まで残さないようにスタッカートで止める。

❽(Gt.)：少々タイムがずれているが、おそらくこう弾くつもりだったのだろう。フレージングは彼の得意なパターンだ。

❾(Dr.)：クラッシュによる刻み。

⑩(Dr.)：このアクセントは、特に意識してつけているようだ。
⑪(Gt.)：大変スピーディなライト・ハンドによるフレージング。できるかぎりの速さでタッピングした、という感じだ。

⑫(Gt.)：1～2拍は、2拍のスペースに15の音が出てくるが、これ以上の符割りは不可能だった。これもフレージングは彼の得意パターン。

⑬(Gt.)：1/24E音をF#音までチョーク・アップしている感じに聴こえるが、この曲ではストラトを使っているようなので、1/22のチョーキングというのが正解だろう。

⓮(Dr.)：(　)内のスネアは２×のみ入るもの。

⓯(Dr.)：４拍目アタマは、３×ではアクセント・クラッシュになる。

⓰(Dr.)：(　)内のスネアは１、２×。

⓱(Dr.)：(　)内のスネアは１×のみ叩く。

⑱(Dr.)：ミス・ショットのように聴こえるが、テープ編集によるものかもしれない。

⑲(Dr.)：このあたりのハイハットが不自然な感じなのも、やはり⑱と同じ理由によるものだろう。

Good Enough
グッド・イナフ
Why Can't This Be Love
ホワイ・キャント・ディス・ビー・ラヴ
Get Up
ゲット・アップ
Dreams
ドリームス
Summer Nights
サマー・ナイツ
Best Of Both Worlds
ベスト・オブ・ボース・ワールズ
Love Walks In
ラヴ・ウォークス・イン
"5150"
"5150"
Inside
インサイド

RittorMusic 定価2,200円★